

LEADERS NOW!



■リーダーズ・ナウ [在学生インタビュー]



オーケストラ 交響楽団で、 皆で合わせることの喜びを

3年ぶりにして初のサマーコンサートを経て

●文化会交響楽団 法学部3年次生 富永 実蘭さん
法学部3年次生 森下 爽風さん

6月11日、吹田市文化会館メシアター大ホールにて、関西大学交響楽団第45回サマーコンサートが開催された。コロナ禍により2020年と2021年は中止となっていたが、今回は2005年から交響楽団との親交が続く高谷光信さんを客演指揮者に迎え、3年ぶりの開催がなかった。コンサート開催までの取り組みや交響楽団の魅力について、団長の富永さんと指揮者の森下さんに話を聞いた。



富永 実蘭—とみなが みらん (写真右)
■2001年兵庫県生まれ。須磨学園高等学校卒業。文化会交響楽団第72代団長を務める。パートはピアノ。中学生時代は吹奏楽部で金管楽器を担当。大学では、「経験したことのない弦楽器を演奏してみたい」とピアノを選択。
森下 爽風—もりした さやか (写真左)
■2001年兵庫県生まれ。神戸市立葺合高等学校卒業。文化会交響楽団の指揮者を務める。チェロのパートも担当。吹奏楽部だった中学1年生の時にオーケストラを聴きに行った際、チェロの音色に惹かれる。

—富永さんはピアノ、森下さんは指揮者・チェロが担当パートですが、2人とも大学から始めたのでしょうか？

富永 ピアノは未経験でしたが、交響楽団では同じパートの先輩が1対1で教えてくれるようになっていて、私も先輩に教わって演奏できるようになりました。現在、団員は89人で、私を含め吹奏楽の経験者は多いです。でも、大抵の人は管楽器や打楽器奏者。弦楽器はほとんどの人がゼロからのスタートです。

森下 私もチェロは初心者でした。団員の3割ほどは未経験者ですが、卒業する頃には難しい曲も弾けるようになっていきますよ。

—団長と指揮者には、自ら志願したのですか？

富永 団長は多数決です。私は人前で話すのが苦手だったので、この機会に克服するのもいいかなと思い、引き受けました。団長は年次を問わず、全員と話す機会があったのでよかったです。

森下 指揮者は誰もやりたがりませんでした(笑)。でも考えてみたら、楽器は社会人になっても市民オーケストラなどで演奏できますが、指揮はそうした団体には常任指揮者や客演の方がいます。



アマチュアが大きな編成で指揮できるのは貴重な機会だと思います。挑戦してみることにしました。

—3年ぶりにサマーコンサートが開催されましたが、運営するにあたって戸惑いもあったのではないのでしょうか？

富永 入団してから2年間、サマーコンサートも合宿もなかったので、これまでどのように準備していたのかが分からず、OB・OGの方からすべてを聞きに行き、相談しながら進めました。もちろんコロナ禍では感染予防対策も必要で、これは先輩も未経験のことだったので特に大変でした。考えなければならぬことが多かったですが、その分勉強にもなったと思います。

—コロナ禍での練習はどのように進めたのですか？

森下 大学の部室は人数制限があって全員は入りきらないので、合奏練習は週2回、学外の施設を借りて行いました。練習を進めること自体にも慣れていなかったし、限られた時間の中で曲の完成度を納得のいく範囲にまで高めることには行き詰まりも感じました。
富永 合奏以外はどうしても個人練習ばかりになってしまい、練習量に差が出てしまうのも悩ましかったですね。

個人的には、学外練習をする時の楽器運搬を担当していたので、それが大変でした。打楽器やコントラバスなど大きな楽器が多いので、毎回、大学と練習場所を3~4往復、レンタカーを運転して運搬しました。練習時間に間に合わせるため、とにかく時間との闘いでした。

—コンサート本番はどのような心構えで臨みましたか？

森下 正直、練習時間は十分とはいえなかったのですが、演奏ではミスしないよう曲を成立させることに注力しました。指揮者としては、どうしても細かいことが気になって一つのパートの一部分にフォーカスしてしまいがちだったので、全体を広く見ながら進めるよう心掛けました。



客演指揮者・高谷光信さん

—客演指揮者・高谷さんの印象や、高谷さんから学んだことは？

富永 曲の情景をうまく伝えてくださる先生ですので、音の出し方のイメージを捉えやすかったです。打楽器など、パートによっては曲の最後にしか出番がない場合もありますが、練習に出席している団員に合わせて演奏箇所を考慮して声も掛けてくださり、全体への気配りはとても勉強になりました。

森下 私は指揮の振り方など親身に教えていただきました。指揮する時はミスやリズムの崩れなど、マイナス面に目が行きがちですが、「自分のためにも皆のモチベーションのためにも、前向きな明るい言葉を掛けるように」とアドバイスをいただきました。オーケストラは具体的なBPM(テンポ)など、指揮者の譜面の解釈や表現によって、本当に雰囲気が変わると思います。

—当日はネット配信もありましたね。お客様の反応はいかがでしたか？

森下 視聴者数は123人、来場者数は395人でした。座席の人数制限があった定期演奏会よりもやはり盛り上がり、来場者アンケートでも良い反応をいただきました。

—サマーコンサートを経験していかがでしたか？

森下 コンサートに向けて皆で定期的に集まり、無事開催できたことが本当にうれしかったです。でも、本番では完璧に演奏できたとは言えないので、欲を言えばもう少し練習時間が欲しかったですね。

富永 コロナ禍で入団が9月になり、自分のパートのメンバーしか知らないまま1年が過ぎて、最近やっと同期のメンバーとも会える状況になりました。仲良くなると、弾き方などいろいろ相談もできるし、以前とは結束も全然違います。

—交響楽団の魅力を教えてください。

森下 オーケストラはチームプレーであること。そして演奏する曲それぞれに歴史的な背景があり、曲を理解することで、そうした知識を得ることができるのも魅力だと思います。

富永 ソロなら自分のことだけを考えればいいですが、オーケストラは全体の調和が重要。「このパートは大きな音が出せないから、周りが音量を下げよう」というように、広く全体を俯瞰して見る力が養われますね。

—今後の抱負を聞かせてください。

富永 10月は大学昇格100年記念イベントでの演奏会、12月は定期演奏会が控えています。定期演奏会が終わったら役職者は交代となるので、団長としてこれらの演奏会を成功させることが大きな目標です。

森下 サマーコンサートはやるべきことを順にやっていくだけで精一杯な状態でした。次の演奏会では、もっと演奏のクオリティと完成度を上げられるように頑張りたいです。

ウクライナに“音楽を奏でる自由”を取り戻す ●指揮者 高谷 光信

関西大学交響楽団とは、恩師・藏野雅彦先生の弟子として訪れたことがきっかけで、15年以上のお付き合いになります。今回のサマーコンサートでは、学生の皆さんは出来る限りの準備をされ、その自主運営はとて立派だったと思います。2年間の断絶を経てもおお、「関大サウンド」は確かに継承されており、その明るく瑞々しい音は会場のお客様を笑顔にしていました。

私が所属するウクライナのチェルニーヒウフィルの団員たちは今この時も、楽器を銃に持ち替えて戦っています。帰国後も彼らとのメッセージのやりとりを続けていますが、「返信=生きていく」という一通の重みがそこにはあります。音楽は文化の架け橋です。国境を越えて人々を癒やし、慰め、明日への活力を平等に与えるものであると私は信じています。

私は今、日本ウクライナ音楽協会の理事長として、「停戦後のウクライナ音楽界復興」を理念に掲げ、日本で支援活動を行っています。音楽家たちにとって最も大切な“音楽を奏でる自由”を取り戻すこと。そして、その音楽にはウクライナの人々の心を癒やし慰める力があること。その先に必ず喜びがあることを信じて、私はこれからも音楽家として活動を続けます。



■1977年京都府生まれ。ウクライナ国立チャイコフスキー記念音楽院指揮科首席卒業。東京混声合唱団指揮者、ウクライナ・チェルニーヒウフィルハーモニー交響楽団 常任指揮者、一般社団法人日本ウクライナ音楽協会 理事長。東京混声合唱団、ウクライナ国立ドムカ合唱団、大阪交響楽団、セントラル愛知交響楽団、フジコ・ヘミング等と共演。大阪芸大客員准教授、名古屋芸大、武庫川女子大各講師。現在はウクライナ支援コンサートを開催するなど、ウクライナの同僚たちが音楽を再開できるよう支援活動にも尽力。